

研究分野のキーワード：虫を無視できない農業，農業地域の自立的発展，EUの地域統合と国境地域，教員の力量形成と教員養成，社会科副読本

研究紹介

地理学と聞くと、中学校社会科の地理的分野か、地図帳をイメージするだろうか？

私は人文地理学を専門として、①農業のこと、②EUの地域統合のこと、③社会科教員の力量形成に関わることを研究テーマとしている。一番わかりやすいのは最後の「地理学と教員の力量形成」だろうか。これなら、「教員養成大学の教員として、先生の卵たちに中学校の社会科地理的分野の内容を教えているのだから教員の力量形成につながる」と思えるだろうから。むろん、このようなことも教えるのだが、私の研究テーマはやや異なる。小学校3・4年生の頃、自分の住んでいた町を調べたことを覚えているだろうか？この身近な地域の学習を先生が自ら教材開発して行うには、どのような力をつければいいのか、あるいはそのような力をいかにしてつけられるのかを研究しているのが、この③のテーマの当面の中身。それを教員養成段階で行う方途を求めて、学生諸君に社会科副読本を作成してもらっている。ただ、それらの発想は地理学的手法にある。

地理学は私たちが住んでいる地表上で展開される人文現象や自然現象を研究の対象とする。農家出身ではないが、農業活動に興味があって特定の地域の農業がいかに自立的に発展してきたのかを研究してきた。ヨーロッパと日本の有数な施設園芸地区である、オランダのウェストラントと愛知県渥美半島の風景を比べると、その類似性に驚かされる。しかも、オランダの施設園芸技術が渥美にやっけてきていると聞けば、さらに驚く。風景の類似は両地域の仕組みや特性が似通っていることを意味する。このように風景を観て、地域を比較することが地理学的手法の一つ。しかし、技術が伝わるにはさまざまな障害を越えなければならない。それらはどのような仕組みでその場所にあり、なぜ可能になったのか？人や組織などがいかにその発展に関わったのか？これらを総合的病害虫管理という虫を無視しない農業を導入した産地で調べるのが、①の農業地理学に関わる今のテーマ。

オランダつながりと言えば、ベネルクス3国がECSCやEECの発足に果たした役割はよく知られている。しかし、独蘭国境地域が地域統合の実験室と呼ばれ、EUの東欧拡大に大きな役割を果たしたことはあまり知られていないかと思う。②の研究テーマはここに焦点を当て、EUの地域統合下で独蘭をはじめ、国境地帯にどのような変化が生まれつつあるのかを調べるもの。ただ、独蘭ともに料理がおいしくないのがこの調査の難点かな。

こんな3つのテーマが私の目下の関心事だが、他人から見ると「地理学って何？」という疑問がさらに大きくなるかもしれない。そういう方はともちのことわりに地理学を学び、地理学のおもしろさを児童・生徒に伝えて欲しい。決して、地理は暗記するものではないのだから。